

●グローバル化時代の医療・検査事情 36

世界の医学部を巡って(13)
Ⅱ アジア編 香港・中国

な ら のぶ お
奈 良 信 雄
Nobuo NARA

や大学等がある²⁾。

A. 香港

香港は中華人民共和国香港特別行政区として、東京の半分程度の面積である約 1,106 平方キロメートルに、約 752 万人が暮らしている (2019 年)¹⁾。

歴史を振り返ると、1842 年に南京条約によって香港島が、1860 年の北京条約によって九龍半島の先端がイギリス領土となった。さらに、1898 年には中国との租借条約により、イギリスは 235 の島を含む新界の 99 か年にわたる租借を確保した。そして、1982 年から中国とイギリスは香港返還問題の交渉を開始し、1997 年 7 月 1 日、香港は中国に返還された。

以来、いわゆる、「一国二制度」として香港特別行政区には「高度な自治」が認められ、従来の資本主義制度と生活方式が 50 年間は維持されると定められている。金融業、不動産業、観光業、貿易業が主要な産業になっている。

I. 香港の教育制度

香港の教育は、香港特別行政区政府教育局が所管している。かつてはイギリスの影響を受けて教育制度は 6-5-2-3 制であったが、2009 年に学制が改革され、現在では、初等教育 6 年、前期中等教育 3 年、後期中等教育 3 年、学士課程 4 年の 6-3-3-4 制になっている。義務教育は、初等・中等教育の計 12 年間で、公立学校では、無償で教育を受けられる。義務教育修了後の進路には、職業教育機関

Ⅱ. 香港の医療事情

香港人の平均寿命は、男性 81.17 歳、女性 86.75 歳と長寿地域である (2014 年)。医療機関には、香港政府医院管理局によって運営・管理される公立と、私立がある。公立の医療機関は、42 の病院、47 の専門診療所、73 の一般診療所があり、一方、私立の医療機関としては、11 の病院が登録されている³⁾。

公立病院の医療水準は高く、少額の費用負担で最先端の医療を受けることができる。香港市民や香港に居住する外国人は、1 日最大 100 香港ドルで公立病院を利用でき、診察内容によっては私立病院の 100 分の一程度の費用で治療が受けられる。このため、長期の診療を必要とする患者や比較的重症の患者の多くが公立病院で医療を受けている。もっとも、診察予約を取りにくい、待ち時間が長い、などの課題もある。

一方、私立の医療機関は予約がスムーズで、医師の選択も可能で、利便性が高い。また、私立病院には最新の医療設備が備えられ、最先端の医療を受けることもできる。ただし、医療費のほとんどが自己負担となり、高額な医療費を請求されるのが欠点である。

Ⅲ. 香港の医学教育

香港には、1887 年創立の香港大学 Li Ka Shing 医学部 (香港大學李嘉誠醫學院) と、1981 年創立の香

港中文大学医学部がある⁴⁾。いずれも公立である。

香港大学李嘉誠醫學院は、香港島に突き出た半島の小高い丘の上にある。1887年の創立当初はHong Kong College of Medicine for Chineseと呼ばれ、その後Hong Kong College of Medicine、さらにFaculty of Medicine University of Hong Kongと称されていた。そして、李嘉誠(Li Ka-shing、1928年6月13日生)から10億香港ドル(1億2800米ドル)の寄附を受けて香港大學李嘉誠醫學院(Li Ka Sing Faculty of Medicine, University of Hong Kong)と改称され、今日に至っている。

李嘉誠は、中卒ながら運輸、不動産、金融、小売り、エネルギー事業などで財をなした立志伝中の人物で、資産は310億米ドル、世界長者番付8位にランクされている大富豪である(フォーブス誌2013年3月)。自らは質素儉約を貫き、故郷にある汕頭大学を始め、ケンブリッジ大学、スタンフォード大学、マギル大学、アルバータ大学、カリフォルニア

大学サンフランシスコ校、カリフォルニア大学バークレー校、シンガポール経営大学、メルボルン癌研究センター、など世界に冠たる大学に多額の寄附を行っている。おそらく、教育を受けたくても満足に学べなかった彼が、若者の育成のために寄附して教育の振興に尽力しているのだろう⁵⁾。

香港大學李嘉誠醫學院では2016年に学生の評価に関する国際シンポジウムが開催された。僕は、イギリス、アメリカ、カナダなどの招待講演者とともに招かれ、講演した(写真1, 2)。テーマは「Promoting Excellence in Assessment」で、医学生にとって特に重要な臨床実習現場での評価Work-place based assessmentのあり方が熱く論じられた。

シンポジウムは医学部構内で開催された。医学部は立派なビルで、講堂などの施設、設備もよく整っていた(写真3)。会場の入り口付近には、忠・孝・仁・義・礼・智・信・恕の儒教道徳が書かれた台座に孫文がすっと立っていた(写真4)。道徳を論



写真1 香港大學李嘉誠醫學院で開催された国際シンポジウムで基調講演



写真3 香港大學李嘉誠醫學院



写真2 香港大學李嘉誠醫學院で開催された国際シンポジウム招待講演者

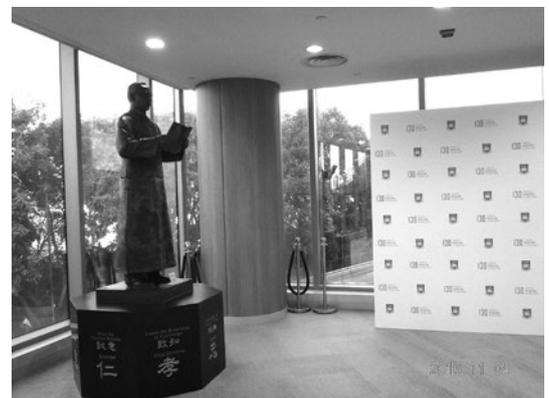


写真4 儒教の文字が入った台座に立つ孫文像と創立130周年記念パネル(香港大學李嘉誠醫學院)

じた孔子をいまも敬っているのだろう。また、創立130年を記念したパネルが目をつけた。

医学部は6年制で、英語で教育が行われている(表1カリキュラム⁶⁾)。思考能力に富み、効果的で人類愛に満ちた医療を実践でき、かつ生涯学修能力に長けた医師を育成することを使命に掲げ、その目的を達成するために、「人類の健康と疾病に関わる医学」、「医療技能」、「公衆衛生」、「医療倫理」の4テーマを修得することを目標にしている。

カリキュラムの特徴は、まず最初の2年間で医学知識がモジュール制で教育され、3年次は展開コース、4～6年次はクリニカルクラークシップで段階的に臨床技能を磨く構成になっている。臨床能力に秀でた医師の育成を目的としたカリキュラムにはいるが、3年次の1年間は展開コースとして、「国際貢献/人道支援活動」、「研究活動」、「学際教育活動」から選択必修のプログラムが生まれ、幅広い人材を育成する特色ある取り組みと言えよう。

なお、2012年からは5年制カリキュラムも導入されている⁴⁾。

IV. 香港の旅行記

香港の印象を一言で表現するとすれば、「活気」

といえる。

2019年の香港から中国本土への容疑者引き渡しを可能にする「逃亡犯条例」改正案を巡り、それに対する反対デモでも、その活動力を見せつけられた。イギリスの統治を150年以上にわたって受けた香港は、わずか1,106平方キロメートルの面積に、約752万人が住み、活気が渦巻いている。日本でもっとも小さい県は僕の郷里でもある香川県だが、それでも面積は約1,877平方キロメートルで、人口は95万人そこそこだ⁷⁾。如何に香港が人口過密であるかは、推して知るべし。

シンポジストには、大学にほど近い四つ星ホテルのデラックス・オーシャンビュー・ルームを主催者が用意してくれた。ホテルから見ると、鉛筆のように細長いビルがニョキニョキと乱立し、人口過密を吸収しているようだった(写真5)。立錫の余地がないとは、このような状況を指す言葉だろう。火災や地震に見舞われるとどうしたものか? 小心者としての心配は尽きない。

ホテルには、アメリカ、カナダ、イギリスなどからの招待者も泊まり、一緒に食事をとり、かつマイクロバスで10分ほどかけて医学部を往来した。

シンポジウムの合間を縫い、海外招待者は一斉に町に繰り出した。香港の夜景はナポリ、函館と並ぶ

表1 香港大学李嘉誠医学院カリキュラム

第1学年 医学専門教育課程													
教養科目、医学入門			第1学年 形成的評価	心肺系、腎泌尿器系ブロック				第1学年 総括試験					
第2学年 医学専門教育課程													
消化器系 ブロック	筋骨格系 ブロック	頭頸部、 神経系ブロック	第2学年 形成的評価	頭頸部、 神経系ブロック	血液/免疫系ブロック	内分泌/生殖系ブロック	第2学年 総括試験	実践中国語					
第3学年 展開コース													
国際貢献/人道支援活動、研究活動、学際教育活動から選択必修									第3学年 総括試験				
9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月				
第4学年 臨床実習													
臨床医学入門		第4学年 形成的評価	前期クリニカルクラークシップ					第4学年 総括試験					
			ローテーション(1)		ローテーション(2)		ローテーション(3)						
			ブロックA: 内科系/ブロックB: 外科系/ブロックC: 癌、感染症、その他コモンディーズ										
8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月				
第5学年 臨床実習													
後期クリニカルクラークシップ				専門科クリニカルクラークシップ									
ローテーション(1)		ローテーション(2)		ローテーション(3)		ローテーション(1)		ローテーション(2)		ローテーション(3)		ローテーション(4)	
ブロックA: 内科系/ブロックB: 外科、整形外科、外傷/ ブロックC: 救急、緩和ケア、眼科				家庭診療科および地域医療、内科、外科、産婦人科、小児科/ 老年科、精神科、整形外科/外傷/救急									
第6学年 臨床実習													
専門科クリニカルクラークシップ				補習		最終総括試験		選択実習		プレインタナ シップ			
ローテーション(4)		ローテーション(5)		ローテーション(6)		ローテーション(7)							
7月	8月	9月	10月	11月	1月	2月	3月	4月	5月	6月			

世界三大夜景の一つだ。見逃す手はない。まずは100万ドルの夜景観賞で有名なヴィクトリア・ピークへ。イギリスの統治下にあったせいだろうが、シンガポールにしても香港にしても、やたら英語名が多い。「太平山頂」と単純に言ってくれりゃ訳ないのに…。

ピーク・トラムというケーブルカーで山頂を目指すことにした。僕が知っているくらいだから、世界の誰もが知っている。山麓駅のケーブルカー乗り場にはすでに長蛇の列になっていた。一回の輸送能力が低いものだから、10分間隔だとは言うものの、小一時間ほども待たされた。やっと乗り込んだケーブルカーはゆるりゆるりと登り始めたが、途中からは車窓に夜景が見え始め、乗客は歓喜の声。延々と待ったかいもあるだろうというもの。山頂のピーク・タワーにはスカイテラス展望台があり、港、高層マンション群、九龍半島が眼下に広がり、しばし見とれた(写真6)。



写真5 香港市内(ホテルからの眺望)



写真6 ヴィクトリア・ピークからの夜景観賞

対岸にある九龍からは、ヴィクトリア・ハーバーで幻想的なA Symphony of Lightsを鑑賞した。音楽とナレーションに合わせて、レーザービームが夜空に映えた(写真7, 8)。「世界最大の光と音の長時間ショー」としてギネスに認定されているらしい。

町の中を見て回るには、MTR(港鉄)という鉄道と、二階建てのトラムが便利(写真9, 10)。台湾と同様に儒教の精神が脈々と続いているらしく、実に高齢者にやさしい。当時67歳だった僕は、小児運賃よりも遙かに安いone-dayパスを購入でき、市内をゆっくり回ることができた。

香港島から対岸の九龍へはフェリーで渡った(写真11)。九龍には超高層ビルが乱立し、活気に満ちあふれていた。そういえば、香港ではどこの路地に行っても人々の喧噪であふれ、活気と熱気が感じられた(写真12, 13)。ほんのりした淡い色を好む日本人に比べ、自己主張が強いのか、中華系人は周囲を憚らずに大声で話をする。「奥ゆかしい」という

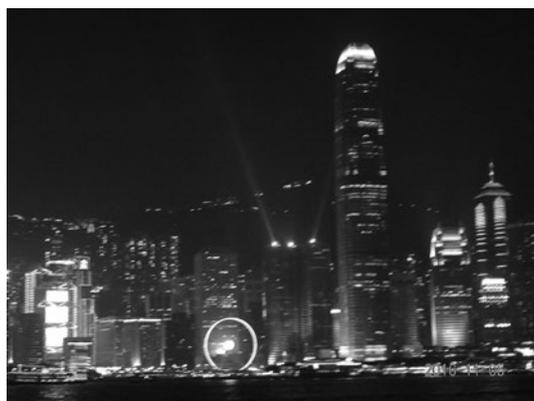


写真7 ヴィクトリア・ハーバーでの幻想的なA Symphony of Lights



写真8 ヴィクトリア・ハーバーで幻想的なA Symphony of Lights



写真9 二階建てバス



写真12 女人街



写真10 バス車内から



写真13 香港B級グルメ



写真11 香港島からフェリーで九龍へ

言葉は中国語にはないのかしら？いや、むしろ国際競争に勝つべく、華僑が必然的に身につけた処世術に違いない。シンガポールにしても香港にしても、その熱気には圧倒される。アジア1位と自負する日本もうかうかしてはられまい。

ところで、香港と言えば、“麵”。麵好きとして見逃せない。高級レストランは招宴で招待されたので、ここはむしろ地元の人が通う店で。そう思って町の

いわゆる麵専門店で覗いた。数あるメニューから選んで食べたが、予想以上に美味しく、満足できた。が、店を出てふと裏を覗いてビックリ。な、なんと“〇〇一丁”の段ボールが山積み。

世界に名を馳せる香港麵店が、日本のインスタント麵を使って料理しているのか!? 道理で、美味しいはずだ??

B. 中国

台湾、香港と回ってくれば、中国本土を見直すわけにはいくまい。中国の医療制度や医学教育についてはまだまだヴェールに包まれた感もあり、知りたいと思う読者も少なくないと思う。かくいう僕自身も中国の医学教育の事情を調査すべく、勇んで出向いたものの、3日間で北京を2往復する羽目になり、天津医科大学をたったの2時間しか訪問できなかった。このため確実な情報を収集できず、曖昧な情報で誤解を招かないよう、中国は旅行記を中心に留め、詳細は別の機会に報告したい。

総面積が約 9,634,057 平方キロメートル、人口約 13 億 8 千万という巨大な中国には、WDMS によれば 186 の医学校があるそうだ⁴⁾。もっとも、既に廃校になった医学校も掲載されており、不透明な部分もある。

2019 年 4 月に開催された世界医学教育連盟総会での僕の基調講演を聴いた天津医科大学医学部長の Han 教授が大層感激し、国際シンポジウムで講演してほしいとの招請がきた。そこで、同年 7 月 26～28 日に京都で学会があった折り、29 日に関西空港から北京に向かうこととした。学会に参加してくれたアメリカ Thomas Jefferson 大学の Gonella 名誉教授、Pohl 教授、佐藤教授と同行した。

もっとも 8 月 1 日には本務の日本医学教育評価機構の理事会が予定されており、どうしても 7 月 31 日には帰国していなければならず、2 泊 3 日のスケジュールを組まざるを得なかった。それでも丸一日は天津医科大学で医学教育を視察調査する計画を立てた。

京都駅から 6:21 発の「特急はるか」で関西空港に向かい、9:40 発北京行きの ANA 機を待つべく、ラウンジで待機した。だが、北京空港からの指示とかで、出発が遅れるとのアナウンス。こんなことなら 5 時起きでなく、もっとゆっくり寝ていれば良かった…。ま、これくらいの遅延は我慢せねば。

どうにか関西空港を出発したものの、ほどなく事件が勃発した。機内で、隣の席は中国人の若者だった。事もあろうに彼は飲んでる水を紙コップごとこぼし、僕のズボンと座席はビショビショ。同じようなことは以前にもカナダからの帰りにあったので、平身低頭の加害者と CA を叱責するまでもなく、座席を交換してもらい、タオルを借りてズボンをぬぐった。カナダの時にはクリーニング代として 50 ドルをもらったが、今回のお詫びは旅行キットだけであった。

遅延に水責め。これくらいなら我慢せねば。何しろ“教育”者なんだから…。と構えていたら、さらに大変なことが起きた。北京空港に近づき、ぼちぼち着陸かと思っていた矢先、機長から、「北京空港の大混雑のために、北京上空を旋回せよとの管制官からの指示だ」、とのアナウンス。北京空港は大勢の人間で、大混雑は当たり前だろうと軽く考えていたが、北京上空をグルグル旋回するうちに時間が経

ち、「燃料が底をつきだしたので、大連に着陸し、給油して北京の指示を待つ」と追い打ちのアナウンス。関西空港を出発してから、すでに 5～6 時間が過ぎていた。墜落するよりはマシと、大連に降りてしばらく待つこととなった。

ところが、大連空港では空港口ビーで待つのかと思いきや、なんと機内でじっと待てとの指示。我慢すること 1 時間。さらに機長が、「北京空港とまったく連絡がとれません。このまま関西空港に引き返します」と追い打ち。

ここまでくれば、それまでじっと我慢していた乗客が騒ぎ出した。出口付近に押しかけ、関西空港でなく、ここ大連空港で降ろせと言う（中国語で騒ぎ立てるので、推測だが）。もっともな要求だと思う。僕にしたって、大連で降りて、這ってでも最終目的地の天津に向かいたいと思ったほどだ。

諦めるしかなく、関西空港に戻ったのは 21:30。京都を 6:00 過ぎに出発したので、すでに 15 時間は経っており、日帰りの中国旅行と相成った。

関西空港でも一悶着。大勢の乗客の中、やっとなさホテルと代替機予約を用意してもらった。ここでどうするか。そもそもが 2 泊 3 日の予定で、7 月 30 日の講演には間に合わない。このまま自宅に引き返すのが賢明だろう。と思って Han 教授と電話で相談したら、彼は 30 日の早い便の飛行機を用意するから、講演は予定の午前ではなく、夕方に開催したいと。仕方ないやと、その日は大阪に泊まり、翌朝に仕切り直すこととした。因みにパスポートには、「出国中止」のスタンプが押されていた。

翌 30 日朝に航空会社のチャーターバスで空港に行き、ANA ではなく中華航空機に乗り込んだ。が、またしても出発は 2 時間遅れ。夕方の講演にすら間に合いそうにもない。どうにか 15 時過ぎに北京空港に到着できたものの、荷物が出てくるまで待つこと 2 時間。大陸の人は我慢強いな～。おかげで講演会はとうとうキャンセル。かわりに天津医科大学関係者と、夕食をとりながらの意見交換会となった。

夕食は中国人特有の大歓待。見たことも聞いたこともない料理が円卓に次々と並び、紹興酒で乾杯の嵐。極めつけに小さな御猪口で「老白干」の一気飲み。御猪口が小さいのには理由があり、アルコール度は 37%。中国北西部の寒冷地の労働者が朝食に一気飲みして体を温め、仕事に出かけるとか。どち

らといえばホワイトカラーの身ではあるが、気にせず折角の老白干を頂戴した。かつては飲み干さないと非礼だとされたが、最近は飲み干さなくてもよいようで、チビチビ飲むこととした。

中国といえばスモッグに自転車と聞いていた。しかし天津には高層のビルが乱立し、道路にはベンツ、BMW、Audi など大型高級車が走っている（写真 14, 15）。もっとも、僕が小学生の頃にしか見たことがない 3 輪自動車が傍らを走っていた。荷台にランニングシャツ姿の子供とスイカを積んでおり、格差をいみじくも垣間見た。

翌朝は 8 時から天津医科大学を訪問した（写真 16）⁸⁾。International school として、150 名ほどの学生をすべて英語で 6 年間の教育を行っている。その名も TMU（写真 17）。5 年次の後期は、午前中が臨床医学の座学講義を受け、午後は「国際医学院模擬医院」の病棟でシミュレーションで臨床実習を受けるらしい（写真 18）。動かない救急車の中で救急医療の体験もしていた。



写真 14 天津市内



写真 15 北辰教育センターの文字があるビル

医療安全を優先し、みっちりシミュレーション教育を行ってから 6 年次に真の患者を対象にしたクリニカルクラークシップを行うカリキュラムになっている。成果を上げているようで、臨床実習は真の患者を対象にすべきと考えてきたが、シナリオをしっかり作成して模擬患者による模擬診療で教育するのも悪くはないかも知れない。



写真 16 天津医科大学



写真 17 天津医科大学玄関前

（左から天津医科大学 Han 教授、Thomas Jefferson 大学 佐藤教授、Gonella 名誉教授、Pohl 教授、僕）



写真 18 国際医学院模擬医院



写真19 北京ダックを切り分けるシェフ



写真21 豪華なランチ



写真20 花卉のように盛りつけされた北京ダック

視察後は天津から北京に戻り、昼食は今回こそ文字通りの北京ダック料理。一羽の鴨をシェフが器用に切り分け、花のようにあしらわれた(写真19, 20)。以前に北京でG7が開催された際の特別メニューだとか。ランチとは言え、豪華な料理のオンパレードで、またもや紹興酒と老白干の嵐(写真21)。帰りは飛行機で眠ればよいので、ままよと杯が進んだ。

中国では料理を残すのが礼儀と聞いていたが、昨今では「モッタイナイ」との思想も推奨されているようで、Han先生は店からドギーバッグをもらって、犬(二本足で立つらしい?)に持って帰るべく、残った料理を詰めていた。

昼食後に同行のアメリカ人3名と別れて北京空港へ向かった。チェックインも、保安検査場も、長蛇の列。またもやじっと我慢。だんだん搭乗時間が迫り、慌ててゲートへかけ込んだ。おかげでお土産を買う余裕がまったくなく、中国で通用する「銀聯カード」を作って持参したのに、使うことがついで

なかった。

ところで、「天津」と言えば、「天津甘栗」に「天津井」。現地で本場の味を食さないのは失礼だ。そう思って「天津井」を探したが、一向に見つからない。たまらず現地の人に聞いたら、「それは日本食だよ。」と軽くいなされた。

とんだ一泊二日の短い、いや“出国中止”もあるので、とても長〜い中国旅行でした。サイチェン(再見)!

文 献

- 1) 外務省資料
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/hongkong/data.html#01> 最終アクセス2021年5月11日
- 2) 大学改革支援学位授与機構ブリーフィング資料
[https://www.niad.ac.jp/n_kokusai/info/hk/no17_BriefingonHongKongQAinHE\(JPN\)_protected.pdf](https://www.niad.ac.jp/n_kokusai/info/hk/no17_BriefingonHongKongQAinHE(JPN)_protected.pdf) 最終アクセス2021年5月11日
- 3) 「香港の医療事情 ~公立病院と私立病院の違いについて~」香港駐在員事務所 秘書 Haw Siu Yun, June
https://www.ncbank.co.jp/hojin/asia_information/chuzaiin_news/pdf_files/hongkong_201604.pdf 最終アクセス2021年5月11日
- 4) WDMS
<https://www.wdms.org/> 最終アクセス2021年5月11日
- 5) 李嘉誠基金
<https://lksf.org/> 最終アクセス2021年5月11日
- 6) 香港大學李嘉誠醫學院ホームページ
<https://www.med.hku.hk/en> 最終アクセス2021年5月11日
- 7) 香川県の概要データ
<https://uub.jp/47/kagawa/> 最終アクセス2021年5月11日
- 8) 天津医科大学ホームページ
<http://eng.tmu.edu.cn/> 最終アクセス2021年5月11日